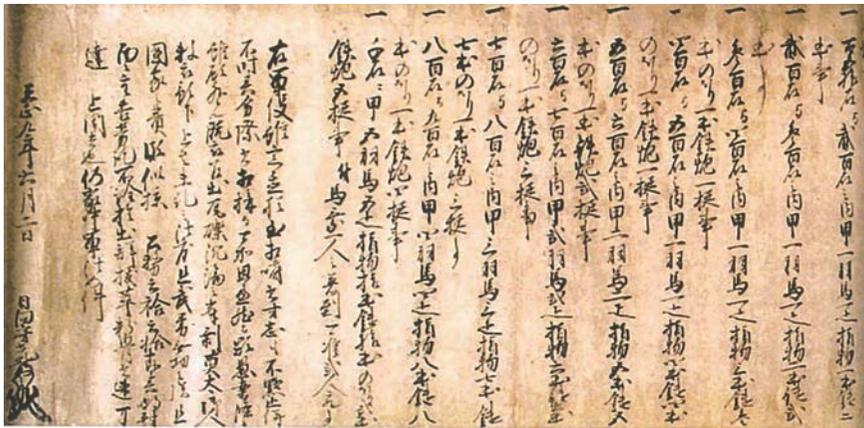




福知山城復元天守
福知山盆地中央に突き出た丘陵先端に築かれた平山城。丹波をほぼ平定した光秀が、天正7年（1579）に京略した堀見（横山）氏築城の横山城に修築を加えた。城名も福知山城と改称し、重臣の明智秀満を城主とした。（京都府福知山市）

西教寺

比叡山南東山麓にある天台真盛宗の総本山。天正3年（1534）9月の比叡山焼き討ちで焼失したが、光秀によって伽藍が復興された。総門は、光秀の居城・坂本城から城門を移築したものとされる。同寺には光秀や照子をはじめ一族の墓も残る。（滋賀県大津市坂本）



明智光秀家中軍法

光秀が定めた箇条書きの明智家の軍法。天正9年（1581）6月2日付。軍団秩序や規律を定めた軍法と石高別の軍役が細かく規定されていた。（京都府福知山市・御霊神社蔵。画像提供：福知山市教育委員会）



織田信長

光秀は永禄11年（1568）、信長に仕えたが、当初は足利義昭と信長に両属していた。将軍・義昭が追放されてからは信長の家臣となり、天正3年（1575）に丹波攻略が命じられた。同7年には丹波一国支配が認められた。（愛知県岡崎市・清洲公園内）

再評価される光秀

軍事面には突出した才はなかったものの、領国経営や行政手腕に長けていた。信長から莊園整理を任された際には、同僚たちの尻ぬぐいをし、領国の治水事業にも才を見せた。織田家中唯一の家中軍法を制定し、家臣団を統制した。船と鞭を使い分ける手腕には、先進性が認められる。

**家臣思いの一面も持っていた
有能な為政者としての手腕**

**領国経営に長けていたが
苛烈な二面も持っていた**

一般に想像されている光秀像といえは、信長という巨大な影におびえ、秀吉の機知に翻弄される、戦下手の文官然とした姿ではないだろうか。

確かに光秀は、軍事面で突出したところはないが、信長の強引ともいえる施政方針を自分なりに解釈し、信長の意に反することなく領国経営を進めることには実に長けていた。永禄十一年（一五六九）末、京周辺の莊園整理などを任された織田家臣団は、不慣れなこともあって不手際を繰り返した。そこには木下秀吉（のち羽柴秀吉）もいたのだが、それらの尻ぬぐいをしたのも光秀であった。

そんな光秀も、非常に苛烈な一面があった。元禄二年（一五七二）九月の比叡山焼き討ちの際、光秀は湖西の土豪・和田氏と八木氏に「延暦寺の味方をする仰木の連中は、絶対にまで斬り（殺殺）にします」という書状を送っている。

**船と鞭を使い分ける
行政手腕に先進性**

いっぽうで、天正元年（一五七三）二月に足利義昭方がこもる今堅田城（滋賀県大津市）を攻めた際には、討死した家臣十八人の供養米を近江坂本の西教寺（滋賀県大津市）に寄進している。牢人あが

明智秀満



斎藤利三



り自分の身に付き従った家臣に対する、光秀の深い憐愍の情が感じられるのだ。その後丹波国（京都府中西部など）を平定した光秀は、家臣を通じて民心を慰撫することを心がけていた。福知山城（京都府福知山市）の城下では、蛇ヶヶ端御殿（明智殿）と呼ばれる由良川の堤防をつくって水害から城下を守ったとい、現在も光秀は同地の尊敬を集めている。

天正八年ごろからは、坂本城改修のために領国の全人民に対して強制的に普請役を命じている。光秀は、軍事目的のため恒常的に領民から徴発をしており、一部では相当な反発もあったようだ。そのためか、天正九年六月には織田軍団中唯一となる家中の定書、通称「明智光秀家中軍法」を發布し、軍務規定のみならず徴用した人夫役や軍役の各種規定も定めている。こうした船と鞭を使い分ける行政手腕は、このころ自領内の検地をすでに開始していたとされる秀吉より、むしろ先進的であったといえよう。

家臣団の忠誠という面においても、光秀の手腕を疑うことはできないだろう。最後の大战となった山崎の戦いにおいても、忠臣たちの奮闘は際立っている。そのなかには伊勢氏、御牧氏、諏訪氏といった旧幕臣たちもいた。彼らは光秀の畿内での行政をおおいに助けたことであろうし、光秀もまたそれに応じて彼らをおおいに重用したであろうことが、その最期の戦いぶりからもわかるのだ。